成功とは

勤勉が成功の要素であると渋沢栄一は述べている。

人は誰しもが成功したいと思っているが、渋沢栄一は“成功”について、「事業が当たって金を儲けたというごときが成功ではなくして、たとえ大なる利益は得ぬでも、ある一つの仕事について、誰にも処し難い事を、彼の人に彼だけの事が成し得たというならば、すなわちこれをもって成功という」（『論語を活かす』明徳出版社）と述べている。

名聞・利欲・色欲に囚われている人は、事業が当たって金を儲けた人や社会的地位を得た人を成功した人として賞賛する。しかし、真の成功とはそのようなものではない。人はただ自分に与えられたツトメを完（まっと）うすることを心掛け、自分の責務を果たし、それで心安らかとなれば、それこそが人生の成功である。道理に則（のっと）って自身の生きる道を定め、誠実に努力し、勤め励んで運命を開拓することこそが成功である。

成功を得るには、志操を堅実にして不撓不屈（ふとうふくつ）の精神を強くし、事の善悪を弁別することが第一ではないか。金や社会的地位といったものは、真の成功の糟粕（そうはく）に過ぎないものであると思い定めることである。そのためには、高い志の下に自分の生きる道を確固と定めなければならない。青年は未来の理想を夢み、中年は現世に心をつくし、老人は過去を説くのが人の常であるが、年齢にかかわりなく一生を貫く志が大切である。その志は、年齢相応のあるいは分に応じた＜健全な野心＞として具体的に意識される。

しかし、人生とは予期した通りに、あるいは計画通りにはいかないものである。そこには辛抱が必要である。辛抱しているうちに周囲の情勢が変わり、志に通じる道も出来てくる。また、辛抱している姿に外部からの共鳴・援助があったりして、最初の計画とは相違しても成功に至る道が拓（ひら）けてくる。

諦（あきら）めないことと信念を貫くことが不可能を可能にすることを肝に銘じておこう。自分の思い通りに行かなくても常に楽観的であることが必要であり、暗い人間よりは明るい人間に他人は惹（ひ）かれ、何よりも楽しく仕事をしなければ自分の人生が楽しくならない。

さらに加えて、一歩先んじることこそ成功の捷路（しょうろ）（近道）である。そのためには常に新しい目で物事を見ていくことが大切である。世の動きというものを敏感に察知し、過去の常識、固定観念その他何ものにも囚（とら）われることなく、また形式に流されることなく、何でも「日新たなり」の心掛けで対処することである。